

【 復活讃詞 第3調 】



てんにあるものたのしめよ、ちにあるもの
天 在 者 樂 地 在 者
よろこべよ、しゅはそのひぢのちからをあら
悦 主 其 臂 力 顯
わして、しをもってしをほろぼし、ふ復
死 以 死 滅 ぼ し 復
くかつのはじめとなり、われらをぢごく
活 首 我 等 地 獄
のはらよりすくい、せかいにおおいな
腹 救 世界 大
るあわれみをたまいたればなり。
憐 賜

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 】



こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光 榮 父 子 聖 神 歸 今
いつもよよに、アミン。
何 時 世 世
しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使 徒 等 同 座 る 物 者 忠
じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實 神 智 の 役 者 聖
なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい
神 撰 笛 愛

に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う
 満 器 我 國 光

し ょ お し ゃ 、 あ し と し ゆ き ょ う せ い ニ コ ラ イ
 照 お 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 な ん ぢ の ぼ く ぐ ん の た あ め 、 お よ び
 爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い
 全 世 界 の 爲 に 生 命 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。
 三 者 祈 給

司祭) (黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、 悉くの天軍より伏拜せられ、 萬物を無より有と
 なし、 人を爾の像と肖とに依りて造り、 爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、 罪を行う者を棄てずして、 其救の爲に痛悔
 を立て、 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、 此の時に於ても、 爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、 爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、 爾の仁慈を
 以て我等に臨み、 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、 我が靈と體と
 を聖にし、 我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、 聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、 爾は聖なり、 我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、 今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 殺 聖 常 生 者 我 等 を
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第3調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、我が神に歌い歌えよ、我が王に歌い歌えよ、

わがかみにうたいうたえよ、わがお
 我 神 歌 歌 我 王
 うにうたいうたえよ。
 歌 歌

誦經) 萬民よ、手を拍ち、歡の聲を以て神に呼べ、

わがかみにうたいうたえよ、わがお
 我 神 歌 歌 我 王
 うにうたいうたえよ。
 歌 歌

誦經) 我が神に歌い歌えよ、



【 使徒經 (アポストロス) 285 端 ティモフェイ書 4 章 9～15 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが ^{たつ} ティモフェイに ^{ぜんしよ} 達する ^{よみ} 前書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹みて ^き 聽くべし、

誦經) ^こ 子ティモフェイよ、^こ 此れ ^{まこと} 信なる ^{まった} 全く ^う 受くべき ^{ことば} 言なり。蓋 ^{けだしわれら} 我等は ^{これ} 此が ^{ため} 爲に ^{ろう} 勞して ^{そしり} 謗
^う を受く、^{すなわち} 乃 ^{かみ} 活ける ^{のぞみ} 神に ^よ 望あるに ^{かれ} 因りてなり、^{ことごと} 彼は ^{ひと} 悉くの人、^{こと} 特に ^{しんじゃ} 信者の ^{きゆうしゆ} 救主な
^{なんぢ} り。爾 ^{こと} 此等の事 ^{いまし} を ^{かつおし} 戒め且 ^{ひとなんぢ} 教えよ。人 ^{としわか} 爾の年 ^{もつ} 少きを ^{かる} 以て ^{すなわちなんぢ} 輕んずべからず、乃 ^{なんぢ} 爾
^{ことば} 言に、^{おこない} 行に、^{あい} 愛に、^{しん} 神に、^{しんこう} 信仰に、^{けつじょう} 潔淨に ^{おい} 於て、^{しんじゃ} 信者の ^{もはん} 模範と ^な 爲れ。^{とくしよ} 讀書と、^{かん} 勸
^ゆ 諭と、^{きょうくん} 教訓とを、^{つと} 務めて、^わ 我が ^{きた} 來るを ^ま 俟て。爾 ^{なんぢ} に在る ^あ 恩賜、^{おんし} 預言に ^{よげん} 由りて、^よ 長老の ^{ちやうろう} 按
^{しゆ} 手を ^{もつ} 以て、^{なんぢ} 爾に ^{さづ} 授けられし ^{もの} 者を ^{ゆるかせ} 忽にする ^{なか} 勿れ。此等の事 ^{これら} を ^{こと} 思念し、^{しねん} 専ら ^{もつば} 之を ^{これ} 務め
^{なんぢ} よ、爾 ^{じやうたつ} の上 ^{しゆう} 達が ^{あらわ} 衆に ^{ため} 顯れん爲なり。

(比較用 口語訳) 子テモテよ、これは確實で、そのまま受け入れるに足る言葉である。わたしたちは、このために勞し苦しんでいる。それは、すべての人の救主、特に信じる者たちの救主なる生ける神に、望みを置いてきたからである。これらの事を命じ、また教えなさい。あなたは、年が若いために人に輕んじられてはならない。むしろ、言葉にも、行状にも、愛にも、信仰にも、純潔にも、信者の模範になりなさい。わたしがそちらに行く時まで、聖書を朗読することと、勧めをすることと、教えることとに心を用いなさい。長老の按手を受けた時、預言によってあなたに与えられて内に持っている恵みの賜物を、輕視してはならない。すべての事にあなたの進歩があらわれるため、これらの事を実行し、それを励みなさい。

司祭) ^{なんぢ} 爾に ^{へいあん} 平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾の ^{しん} 神にも、ア ril l i ya、

【 アリルイヤ 主日第3調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、



誦經) ^{しゅ} 主よ、^{われなんぢ} 我 爾 ^{たの} を ^{ねが} 侍む、願わ^{われよよ} くは我 ^{はぢ} 世 ^え 世に ^え 差を得ざらん、



誦經) ^わ 我 ^{ため} が ^{けんご} 爲に ^{かくれが} 堅固なる ^{われ} 避 ^{つね} 所 ^{かく} となりて、我 ^え に ^{たま} 常に ^え 隠 ^{たま} るるを得しめ ^{たま} 給え、



司祭) (黙誦: ^{ひと} 人 ^{あい} を ^{しゅさい} 愛する ^わ 主 ^{こころ} 宰 ^{かみ} よ、我 ^し が ^{ちえ} 心 ^{いさぎよ} に ^{ひかり} 神 ^{かがや} を ^わ 知 ^{しねん} る ^わ 智 ^わ 慧 ^{しねん} の ^{しねん} 淨 ^{しねん} き ^{しねん} 光 ^{しねん} を ^{しねん} 輝 ^{しねん} かし、我 ^{しねん} が ^{しねん} 思 ^{しねん} 念 ^{しねん})

^め の ^{ひら} 目 ^{なんぢ} を ^{なんぢ} 啓 ^{なんぢ} きて、^{なんぢ} 爾 ^{なんぢ} が ^{なんぢ} 福 ^{なんぢ} 音 ^{なんぢ} の ^{なんぢ} 教 ^{なんぢ} を ^{なんぢ} 悟 ^{なんぢ} ら ^{なんぢ} し ^{なんぢ} め ^{なんぢ} 給 ^{なんぢ} え、^{なんぢ} 我 ^{なんぢ} が ^{なんぢ} 衷 ^{なんぢ} に ^{なんぢ} 爾 ^{なんぢ} の ^{なんぢ} 福 ^{なんぢ} たる ^{なんぢ} 誠 ^{なんぢ} を

^{おそ} 畏 ^{おそれ} る ^い 畏 ^{われら} を ^{ことごと} も ^{にくたい} 入 ^{よく} れて、^ふ 我 ^{およ} 等 ^{なんぢ} が ^{よるこ} 悉 ^{ところ} くの ^{ところ} 肉 ^{ところ} 體 ^{ところ} の ^{ところ} 慾 ^{ところ} を ^{ところ} 踏 ^{ところ} み、^{ところ} 凡 ^{ところ} そ ^{ところ} 爾 ^{ところ} の ^{ところ} 喜 ^{ところ} ぶ ^{ところ} 所 ^{ところ})

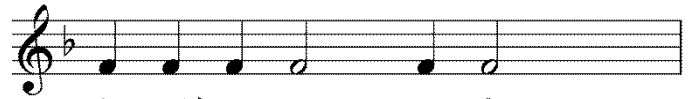
^{おも} を ^か 思 ^{おこな} い ^{ぞくしん} 且 ^{せいかつ} つ ^す 行 ^{いた} いて、^{たま} 屬 ^{たま} 神 ^{たま} の ^{たま} 生 ^{たま} 活 ^{たま} を ^{たま} 過 ^{たま} ぐる ^{たま} を ^{たま} 致 ^{たま} させ ^{たま} 給 ^{たま} え、^{かみ} 蓋 ^{かみ} ハ ^{かみ} リ ^{かみ} ス ^{かみ} ト ^{かみ} ス ^{かみ} 神 ^{かみ} よ、

^{なんぢ} 爾 ^{なんぢ} は ^{なんぢ} 我 ^{なんぢ} が ^{なんぢ} 靈 ^{なんぢ} と ^{なんぢ} 體 ^{なんぢ} と ^{なんぢ} の ^{なんぢ} 光 ^{なんぢ} 照 ^{なんぢ} な ^{なんぢ} り、^{なんぢ} 我 ^{なんぢ} 等 ^{なんぢ} 爾 ^{なんぢ} と ^{なんぢ} 爾 ^{なんぢ} の ^{なんぢ} 無 ^{なんぢ} 原 ^{なんぢ} の ^{なんぢ} 父 ^{なんぢ} と ^{なんぢ} 至 ^{なんぢ} 聖 ^{なんぢ} 至 ^{なんぢ} 善 ^{なんぢ} に ^{なんぢ} し

^{いのち} て ^{ほどこ} 生 ^{なんぢ} 命 ^{しん} を ^{こうえい} 施 ^{けん} す ^{いま} 爾 ^{いつ} の ^{よよ} 神 ^{よよ} と ^{よよ} に ^{よよ} 光 ^{よよ} 榮 ^{よよ} を ^{よよ} 獻 ^{よよ} ず、^{よよ} 今 ^{よよ} も ^{よよ} 何 ^{よよ} 時 ^{よよ} も ^{よよ} 世 ^{よよ} 世 ^{よよ} に、^{よよ} ア ^{よよ} ミ ^{よよ} ン。)

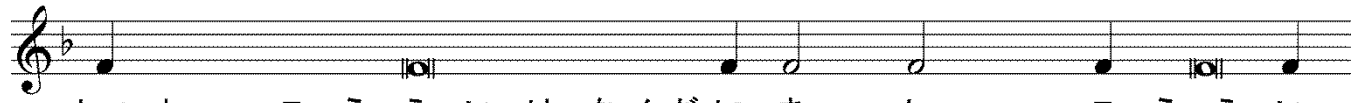
【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書94 端 19 章1~10 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅 ^た み ^{せいふくいんけい} て ^き 立 ^{しゅうじん} て ^{へいあん} 聖 ^{へいあん} 福 ^{へいあん} 音 ^{へいあん} 經 ^{へいあん} を ^{へいあん} 聽 ^{へいあん} く ^{へいあん} べ ^{へいあん} し、^{へいあん} 衆 ^{へいあん} 人 ^{へいあん} に ^{へいあん} 平 ^{へいあん} 安 ^{へいあん} 、

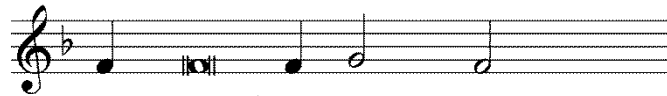


なんぢの し んにも 。
爾 神

司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、 こう え い は なんぢに き し、 こう え い
主 光 榮 爾 歸 光 榮



は なんぢに き す 。
爾 歸

司祭) 謹みて聴くべし、彼の時 イイス イェリホンに入りて過ぎ行けり。視よ、ザクヘイと名づく

る者あり、税吏の長にして富める者なり。イイスの如何なる人たるを見んと欲したれど

も、人の衆きに因りて見るを得ざりき、身の長短ければなり。乃趨り前みて、彼を見ん

ため、爲に無花果樹に升れり、彼此の旁を過ぎんとすればなり。イイス此の處に來りし時、

仰ぎて、之を見て曰えり、ザクヘイよ、速に下れ、蓋我今日爾の家に寓るべし。

彼急ぎ下り、喜びてイイスを接けたり。人皆之を見て、怨みて曰えり、彼往きて罪人

の客と爲れり。ザクヘイ立ちて、主に謂えり、主よ、我所有の半を以て、貧しき者に

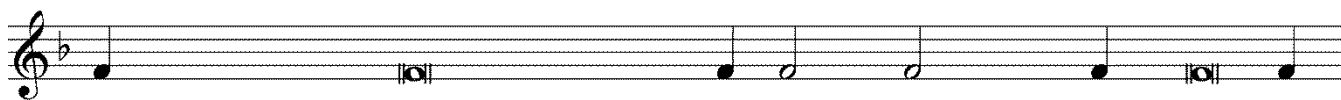
施さん、もし誣いて人より收りしことあらば、四倍にして之を償わん。イイス彼に謂え

り、今日救は此の家に臨めり、此の人もアヴラアムの子なればなり。蓋人の子は亡び

し者を尋ねて救わん爲に來れり。

(比較用 口語訳) イエスはエリコにはいつて、その町をお通りになった。ところが、そこにザアカイという名の人がいた。この人は取税人のかしらで、金持であった。彼は、イエスがどんな人か見たいと思っていたが、背が低かったので、群衆にさえぎられて見るができなかった。それでイエスを見るために、前の方に走って行って、いちじく桑の木に登った。そこを通られるところだったからである。イエスは、その場所にこられたとき、上を見あげて言われた、「ザアカイよ、急いで下りてきなさい。きょう、あなたの家に泊まることにしているから」。そこでザアカイは急いでおりてきて、よろこんでイエスを迎え入れた。人々はみな、これを見てつぶやき、「彼は罪人の家にはいつて客となった」と言った。ザアカイは立って主に言った、「主よ、わたしは誓って自分の財産の半分を貧民に施します。また、もしだれかから不正な取立てをしていましたら、それを四倍にして返します」。イエスは彼に言わ

れた、「きょう、救がこの家に来た。この人もアブラハムの子なのだから。人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである」。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸